
造られた少女と人間

神咲 魅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

造られた少女と人間

【Nコード】

N2067N

【作者名】

神咲 魅

【あらすじ】

戦乱真っ只中の世の中。

兵士志願に城へとやって来た二人の少年は、造られた少女レスティリアと出会った。

「私に、人間の気持ちなんか分からない」

好奇心から彼女について行った二人だがレスティリアはただの少女ではなかった。

容姿も着ている服も例えるならお姫様か伯爵令嬢。そんな彼女はなんと、戦場において膨大な権限を持つ最高指揮官の一人だった――。

悪くない取引？

「っ……たあ」

「悪いな、考え事してた」

「すみませんお嬢さん、大丈夫ですか？ レクス、ちゃんと謝らないと」

レクスと呼ばれる黒い髪に軽鎧をつけた少年にぶつかられて、倒れ込んだ少女は不機嫌そうに差し出された手を眺めた。

「うるせーな、サイラス。だから謝ってんじゃん」

「誠意がこもっていません。ほら、お嬢さん怒ってますよ？」

一人で立ち上がってドレスの裾をぱんぱんと叩き歩いていつてしまおうとした少女の腕を、レクスが掴んだ。

「そう怒るなよ。俺が悪かった」

「別に怒ってないけど。急いでるから失礼するわ」

少女がそう言ったにもかかわらず、レクスは彼女の頬を両手で挟んだ。

「……お前、人形みたいな顔してんな」

ふわふわした長い金の巻き毛と深い青の瞳。陶磁器のように滑らかで白い肌に濃いパープルのドレスがよく似合う。人形のように整った顔の少女は、表情を変えずに言った。

「だって人形だもの」

「……………は？」

「人造人間なの、私」

少女は初めて面白そうにレクスを見上げる。

「驚くの？ 驚いたでしょ？」

「まじか？ そりゃあ驚くに決まってるだろ！ 俺レクス。ちなみにあっちにいる赤毛のやつはサイラス。――お前は？」

「レスティリア・メイガル」

「よろしく願います、レスティリアさん。私がサイラスです」

サイラスが話している間、レクスはレスティリアを見つめていた。

「人造人間か……面白くなりそうな予感がするぜ」

サイラスは赤みがかかった少し長めの髪をしていた。細身だが弓を

背負っている。

よく見ると黒髪の少年も、腰に剣を下げていた。
兵士志願に來た新人か、とレスティリアは勝手に推測する。

「ふうん、貴方がサイラスかあ。それじゃあね、ばいばい」
「ちょ、レスティリアさん!？」

すたすたと歩き去るレスティリアの背に、レクスが声をかけた。

「待てよ!」
「私、早く帰らないとナテイル様に怒られるの」

聞き覚えのある名前に、サイラスが反応した。
レスティリアはそれを聞いて眉をひそめる。

「ナテイル様ってこの国の国王陛下のナテイル様ですか？ も
しかして貴女は王宮メイドさんでしたか」
「まっ！ 失礼ね。私はメイドなんかじゃなくてよ。ナテイル様
は友人であり陛下であり、育ての親でもあるの」
「ということは、あんたナテイル様に造られたのか……?」

首を傾げたレクスを前に、レスティリアは腰に手を当ててみせる。

「鋭い。でも惜しいわ。ナテイル様は私を拾って下さったの。拾

われた前の記憶がないのね、私。だから誰に造られたのかは知らない。この名前もナティール様がつけてくれたの」

そこまで言つて、レスティリアは口を押さえた。

「あついけない、暇人と話してる時間はなかったわ。ばいばいっ！」
「誰が暇人だ！」

走るレスティリアの前にレクスが立ちふさがる。

「レスティリアさん。私たちも城に用があるんですが道が分からなくて。いっしょに行きませんか？ 貴女は私たちの道案内を。私たちは貴女の護衛を。どうです、悪くない取引でしょう」

「そんな格好で護衛も付けずに、のこのこ一人で歩いてたら襲われつぜ。俺、剣にはちよつとばかり自信があるんだけどなー？」

「あいにくね、身の程知らずを返り討ちにする事ぐらい一人で平気ですの。でもいいわ、道が分からないなら勝手について来て頂いて結構」

そのかわり、と言つたレスティリアは笑顔で二人を見つめる。

「レスティリアがいつまで言うまで護衛してね」

「なんだ、お安いご用だな。仰る通りに致しますよつと」

「男に二言はないわね？」

「はい。任せて下さい、レスティリアさん」

レスティリアは満足げに頷くと、先ほどとは打って変わってゆっくりと歩き始めた。

「なあレスティリア。そんなゆっくりでいいのかよ？」

「いいの。ナテイル様への上手い言い訳が考えついたから。それより貴方たちは城へ何の用なの？」

「戦争真っ只中ですからね、兵士志願。私は弓兵、レクスは剣士」

「ふーん、やつぱり。私が見てあげてもいいよ？ またとないチャンスだと思うけど」

軽い調子で言ったレスティリアをレクスが笑う。

「はは、冗談きついで。レスティリアに見てもらってもなあ」

「そうやっていつもチャンスを逃しちゃうのね。残念だわ」

意味深に呟いた彼女は大げさに溜め息をつく。

すると、レクスがふいに剣を抜いた。

「……………下がってな。賊が来た」

「あら。気づくの、思ったより早いのね」

のほほんと言つてのけたレスティリアの腕をサイラスが引く。

「レクス、賊は頼みましたよ。私はレスティリアさんの護衛に専念しますから」

「おう！ 任せとけ」

現れた賊をレクスが迷い無く斬つていき、彼が倒し損ねた輩はサイラスが確実に射殺す。

幸い敵の数も多くなく、戦いはすぐに終わった。

「よし、終わり！」

「血だらけじゃない、みつともない」

「……レスティリアお前なあ……もっと、労るとかねぎらうとかないのか？ ほとんど返り血だけだよ」

「剣は至近距離だから返り血を浴びるのが当たり前、じゃないんだよ？ 返り血浴びてる内はまだ見習い兵士ね。精進なさい」

「は……はい。って、何でお前そんな事知っているんだ！」

「さあね。まあ、兵士登録も済ましてない新人にしてはやる方かな。ナティール様に報告しといてあげる」

こいつ何かおかしい、とレクスは思った。

目の前で戦いが起こっているというのに悲鳴も上げないなんて、普通の少女のことじゃない。

「人造人間だからか……？」

「レスティリアさん、怪我は？」

「ないよ？」

「それは良かったです」

微笑むサイラスに、レスティリアが告げた。

「さあ、もう少しで城門つくわ」

国王陛下との面会

「城門ですね。道案内ありがとうございましたレスティリアさん。
……じゃあ私たちはこれで」

「待ったあ！ まだ私、いいなんて言っていないよ？」

城門前で二人を引き止めたレスティリアを彼らが訝しげに見る。

「城門入っちゃえば安全じゃねえか。護衛の必要ないだろ？」

「いいじゃない、ついて来てくれたって。もともとそういう約束だったし」

「いいですけど……。何か訳でもあるんですか？」

「うふふ、それは後で分かるよ」

妖艶な笑みを浮かべたレスティリアは、迷い無い足取りで城門へと歩み寄った。

「おい待てレスティリア！ 通行書ないと通して貰えないぜ？」

レクスが止めるのを無視して城門の前に立ったレスティリアの姿を見た警備の兵が、慌てたように門を開く。二人は目を疑った。

「レスティリア様」

「ティリア様！ 陛下がお探ししていましたよ」

レスティリアはうんざりしたように手を振った。

「分かっているってばー……。それとあっちに居る二人、私が許可するから入れてね」

「はい。了解しました！」

通行書も見せずにすんなり城に入れたことに呆然とする二人。

「レスティリアお前何者……。まさか陛下の恋人か！？」

「馬鹿じゃないの。ナティール様は私を拾ってくれた人って言うたでしょ」

「でも通行書なしで城門を通れるのは、かなり地位がある方のみですよ」

探るように言ったサイラスに、レスティリアは口角をあげた。

「すぐに分かるよ。貴方たちが兵士志願に来たのならね」

「大体レスティリア、ここ城の最深部だし！ ナティール様が居るところじゃねーか。恐れ多いから俺帰る！」

警備も厳しい城の最深部だというのに警備兵はレスティリアの姿を見ては頭を垂れ、とうとう国王陛下の居る場所まで来てしまった。

「だーめ！ 貴方たちも来るの！」

「しかしレスティリアさん。いきなりナテイル様と面会は出来ませんよ。陛下に会うには前もって……」

サイラスの声をかき消したのは、扉の向こうの怒声だった。

「ええい、ティリアはまだか！ 余は待ちくたびれた！」

「ナテイル様、落ち着かれて下さいっ！」

「陛下！ じきに戻られますからお待ちください」

ぽかんと突っ立っているする二人を見て、レスティリアは肩をすくめる。

「まだ二十超えたばかりだから子供っぽいよね。怒られてる兵が可哀想だし、中入ろう？」

返事も待たずにぱあんと扉を開け放したレスティリアは、落ち着いた声で言った。王座に座っていたのは闇のように黒くまつすぐな髪を胸の辺りまで伸ばした美青年。整った顔は不機嫌からか、ゆがめられている。

「ナテイル様、ただいま戻りました。お待たせして申し訳ありません」

「ん……？ やつと帰ってきたかティリア。遅すぎるぞ。あれは持つてきたんだろ？ とうかそこにいる奴らは何だ……？」

「ご安心を。ちゃんと持つてまいりましたわ。彼ら、兵士志願しいんですって。ここまでの道案内を頼まれたんです」

ナテイルが眉間にしわを寄せた。

レクスとサイラスは嫌な予感がしてすぐさま跪く。

「貴様等のせいでティリアが遅れたのか……。本当なら滅してくれようものを。大事な兵力を消してしまうのは惜しいからな、顔を上げよ」

冷や汗たらたらのレクスとサイラスは顔を見合わせた。

「ナテイル様への言い訳って俺らのことかよ……！」

「下手したら斬り殺されますよ……」

彼らの小声に気づかないふりをしたレスティリアはしれと言う。

「黒髪の方がレクス、赤髪はサイラスです。彼ら新人にしては良くやるほうよ。道中、お手並み拝見させて頂きました」

「ふん、明日あたりフェランにでも見てもらえ」
「はっ！」

フェランと言う名前に聞き覚えはなかったが、陛下の御前領くしかない二人だった。

悩みどころの軍隊登録

「私が最高指揮官の内の一人であるフェランだ。陛下が仰っていた二人、とはお前たちのことか？」

「はい、フェラン様。私がサイラスで彼はレクスと申します」

レスティリアのおかげでとんでもないことになった翌日、彼らはフェランのもとを訪れていた。
プラチナブロンドに、白銀の鎧を身に着けているその姿はまさに騎士。最高指揮官の威厳がたつぷりと表れていた。

「兵士志願と言ったな。一度手合わせしてみるか？ 私も剣を扱うのでな」

「そんな。フェラン様とですか！？」

息を呑んだレクスを見てフェランが薄く笑う。

「冗談だ。訓練は兵士登録した後だからな。……さて、どの軍がいい？」

「はい……？」

「兵士はどの指揮官のもとで戦うのかを自由に選べる。この国にいる最高指揮官は今の所三人。アンワールとレスティリア、それに私だ。経験を積みば陛下の軍に入ることもできるぞ」

聞き覚えのある名前に、二人が仰天した。
大声を上げてフェランに詰め寄る。

「れ、レスティリアが!」

「レスティリアさんですか!」

「……何だ? 知り合いか?」

少々後ろへ下がったフェランは疑問符を浮かべて二人に問う。

「あー……えっと、その。軍隊、もう少し考えていいですか?」

「じゃあ兵士登録だけ済ませておくが……。どうした? きちんと説明しろ」

「何でもないです。失礼します!」

へらへら笑ってごまかしたレクスがサイラスを引っ張って、不満げなフェランの前から脱兎の勢いで逃げ出した。ついでと言わんばかりに、途中で出会った兵士を捕まえる。

「すみませんその人! レスティリア……様、はどこにいるんだ?」

「レスティリア様? 魔導治療院で兵士の手当てして下さってると思っよ」

「治療院どこだ?」

「この通路の突き当たり」

「分かりました。ありがとうございます」

サイラスが丁寧にお礼を述べてるうちに、レクスは治療院に飛び込んだ。

「レスティリアあああ！ お前なんで……、あれ？」

静寂に包まれた治療院。レクスを見つめるレスティリアと兵士の視線が痛い。明らかに不審な人物の乱入に、武器を手にとっている者もいる。

「レスティリア様。お知り合いですか」

「そうでなければ、放り出しますが」

冷たい眼差しでレクスを眺めて不穏な言葉を発する兵士らの問いには答えずに、レスティリアはつかつかとレクスに歩み寄る。

「馬鹿。レスティリア様と呼びなさい。……一般兵の前ではね」

彼だけに聞こえる声でそう言うと、兵士たちのほうを振り返ってレスティリアはにこりと笑った。

「今日の治療はここまで。幸い重病人もいないみたいだからね」

「はい。ありがとうございました」

さすがに最高指揮官には逆らえないのか、治療がまだな兵士もぞくぞくと帰って行く。

「どうしても見てもらいたい人は明日来てねー」

兵士たちがいなくなった部屋にはレスティリアとレクス、それに遅れてやって来たサイラス三人だけが残った。兵士たちを見送ったレスティリアは頭を押さえた。

「まったくー。どうして乱入するかなあ」

「どうもこうもお前っ……最高指揮官ってフェラン様が……」

「レスティリアさん……本当ですか？」

レスティリアは頷いた。

「だってどうみてもまだちっちゃな女の子……」

「失礼な。私は人造人間だからずっとこのままなのよ。ちなみにナティール様に拾われた時から数えて十四歳なの」

ふいっとそっぽを向いたレスティリアは表情を変えずに言った。

「ていうか、あなた達どこの軍に入ったの？」

「それが……まだ決めてないんです」

困ったように頭をかいたサイラスにレスティリアが助言をする。

「そっかあー。剣を極めるならフェランのそこかな。あの人結構……いや、かなり厳しいけど。陛下命で忠誠心は一番よ。弓ならアンワール。部下思いで優しいわ。魔法なら私。人造人間だから魔導の最大値が普通の人間より大きいよね。こう見えても、魔法は得意なの」

レスティリアは一旦言葉を切ると、ゆっくり続けた。

「最終的には自分の好みで決めるといいかな。剣士だけフェランの厳しさに耐えかねてアンワールのところに行った人もいれば、弓兵だけど物珍しさで私の軍に入った兵士もいるわ」

「えーどうしよっかな。俺フェラン様のところ入って剣習いたかったけど厳しいんだろ？」

「ま、好きに決めなさいよ。後から変更もできるし。それより新兵は早朝訓練あるけどいいの？ 早く寝ないと明日は二人も参加ですよ？」

レスティリアの言葉を聞いて二人が凍りついた。

「うつわ、早朝訓練か……。俺寝てくる」

「早めに寝た方がいいですね。では失礼しますレスティリアさん」

「うん。指揮官は三人。フェランとアンワールと私。早朝訓練にはフェランは絶対来るわよ。熱心だから。アンワールもほとんどは。

私は気が向いた時にね。後は指揮官直々に頼まれた有力兵士が数名。みんなの名前ぐらいいは覚えといった方がいいよ」

「はい。じゃあおやすみなさいレスティリアさん」

「おやすみ」

治療院から出て行こうとしたレクスは突然声を上げた。

「大事なことを忘れてた！ レスティリアっ、ナティール様の言い訳に俺ら使っただろう。死ぬかと思ったんだからなー！」

「あれえ何のことかなあ。ほらほら五月蠅い人は早く帰ってほしいなー！」

すっとぼけたレスティリアはレクスを扉の外へ追い出すと、鏡に映る満月を見つめた。

「久しぶりに面白くなりそう……。明日の新兵訓練、行こうかしら」

過酷な新兵訓練

「その新兵、だらけるな！」

「お前は構えがおかしい」

「もっと力を入れて剣を振るんだ！」

「うわぁー、フェラン様厳しいな……」

容赦なく飛んでくる注意とひっきりなしに続けられる訓練に、レクスは早くも音を上げた。

「そう、弓は腰だ」

「腕に力をいれて……うん、いい構えだ」

「上手だね。しっか리의を見て射るんだ」

「なあサイラス、アンワール様は優しそうだよなあ」

「……決めました。私はアンワール様の軍に入ります」

「おいー！ 俺どうすればいいと思うか？ 決まんねーよ」

訓練の合間に話す二人に、フェランの目が止まった。

「話す暇があるなら訓練を……」

てつきり怒鳴られると思い身を縮めた二人は、フェランが黙りこくったのと兵士たちの歓声で目をぱちくりさせる。

「ティリア様だっ！」

「ティリア様が来たぞー！」

「やつほおー！ 久しぶだね新兵諸君」

新兵の方を向いてにこにこしているレスティリアに、フェランが詰め寄る。

「ほう…… やつとやる気になったのかレスティリア？」

「フェラン、顔が怖いよ？」

「当たり前だ！ この一ヶ月、一度だって訓練に来たか？ お前がさぼってるせいでこっちは大変なんだ。剣、弓兵はともかく、魔導士の訓練が大幅に遅れている」

レスティリアは腕を組んだ。そして、さも不思議そうに首を傾げる。

「私の代わりの指導、軍隊長のセシルにお願いしたはずよ？」

「ティリア様！ やつといらっしやって下さいましたね！」

走ってきたのは短い茶の髪を持った背の高い眼鏡青年。彼を視界に捉えたレスティリアの頬が引きつる。

「ごめんごめんセシル。貴方に任せすぎたわね……」

それを聞いたセシルは大きく首を横に振り、フェランはため息をつくのだった。

「とんでもございません。ティリア様のお役に立てるのならば本望です」

「騙されるなセシル。レスティリア、巧いように人を操るのはやめろ」

「フェランは黙って！　ありがとねー、セシル」

口を挟んだフェランを押しつけたレスティリアに、アンワールが近づいた。

「やあティリア」

「やつほお、アンワール」

「にこやかに話している時間はない！」

レスティリアの頭を掴んで乱暴に揺さぶるフェランに、アンワールが苦笑した。

見事な金髪がぐしゃぐしゃだ。彼女は不快そうに唇を尖らせた。

「ちょっと！」

「フェラン。ティリアがせっかく来たんだから早く訓練しよう？」

「ナイス正論ね」

調子良く言った彼女を一睨みした後、フェランは言った。

「そうだな。訓練再開だ」

「よーし、魔導士はこっちね！ 私が教えるわ」

魔導士たちの瞳がぱあつと輝いた。

それを見たレステイリアは少々の間罪悪感にかられる。

「ほっときすぎたか……。みんな見たげるから！ こっちおいで」

レステイリアの声が静かな朝に響き渡った。

「貴女は魔力が多いね。多すぎて魔力を操りきれないわ。コントロールを練習なさい、良くなるから」

「君は、タイミングが違う！ 魔力が最大に高まった時に魔法を放つの、そう」

「貴方は魔力の最大値が低いけど……。それでも魔導士を目指すのね？ うん、心意気は立派だと思うわ。今度最大値を高める訓練をしてあげるね。大丈夫、頑張ったらなれるわよ」

レスティリアの的確な指導を受けた新兵達は、みるみる内に上達して行く。

それを見たセシルが小さく息を漏らした。

「さすがティリア様です」

「セシル。ぼやーっと突っ立ってないで手伝いなさいよ」

「は、はいすぐに！」

一時間弱が経過した。

お疲れ気味のレスティリアはパラソルの下の椅子に座り、お茶を飲んでいた。

優雅にティーカップを口元に運ぶ彼女の肩に手がかけられる。

「さぼるな。指揮官が休んでどうする、部下に示しがかんたろう」
「さぼってないよ、フェラン。訓練一通り済んだから魔導士たちは休憩なの」

「そうだねえ……弓兵も大体終わったし。せつかく三指揮官揃ったんだ、相互訓練でもやるうか」

相互訓練とは何か。

魔法を思いのまま操るには魔力だけでなく、膨大な精神力や体力が必要とされる。つまりフェランに死ぬほどしごかれる。

剣士や弓兵も、自分の武器と魔法を合成すると有利に戦えるため魔法を覚えたり魔力の最大値を高める必要がある。ところが剣士や弓

兵の場合、魔力が少量どころか全く無い場合が多い。
そのためひたすら魔法攻撃に耐えて体に魔法耐性をつくる、という
過酷な訓練だったりもする。

「相互訓練だって……」

「嘘っ！ 私魔法だけでいいもん。フェラン様にしごかれるのは勘
弁」

「そっちはまだいいさ。魔法攻撃に耐えるだけってきついんだよな
……」

兵士たちが話し始め、フェランが大声をだした。

「静まれ！ 相互訓練は双方にとって非常に有意義だ」

「魔導士は僕とフェランのところに、剣弓兵はティリアのところに
集まってね」

アンワールが促し、兵士らは仕方なく散っていく。

「魔法を操るには魔力だけではなく体力が必要だ。よって剣士の訓
練と同じことを今から行う。走り終わったら弓と筋力トレーニング、
終わった奴からペアを組んで素振りだ。その後は私とアンワールが
直接指導をする」

「フェラン……走る距離長くない？」

「そうか？ アンワール。魔導士は体力ないやつが多いからな。こ
れでも少なくなしたつもりだが……、そこの兵歩くな！」

注意を飛ばすフェランを遠くで見ていたのはレスティリア。

「もー、私の兵しごいちやって……」

「ティリア様、早く早く」

「今いくよ、セシル」

軍隊長に呼ばれた彼女は兵士たちを二列に並ばせた。

「右の列はセシル、左の列は私が見るよ。魔力の大きさによって訓練の内容違うからね、まずは選別」

「確か魔力あったらレスティリア様と魔法練習だったよな？」

「なかったらセシル隊長の魔法攻撃をひたすら避けるか耐性づくりだぜー……」

ざわめきだした兵士たちを、レスティリアがぱんぱんと手を打って静める。

「はい、最初の人」

「レスティリ、……ア様」

妙な所で詰まった兵を眺める彼女。
兵はレクスだった。

「んー魔力ないね。セシルと耐性づくりかな、はい次」

「まじかよ！……じゃなくて、まじですかレステイリア様」

「うん、頑張つてねレクス」

「レステイリアああ……」

悲惨な声で訴えたレクスだったが彼女は次の兵を見に行ってしまった。

「あなたは魔力あるから私と練習！」

「あなたはうーん……。耐性訓練はなしでいいよ、回避訓練だけ受けて」

「君は耐性だね……。ま、頑張つてセシルからご褒美もらっちゃえ！」

レステイリアグループとセシルグループの二つに兵士たちが分かれた。

兵士たちの志気が低いのを見てレステイリアは意味深に笑う。

「そりゃ耐性訓練とか痛いし面倒だし嫌だよね。必要ないならしなくていいと思うけど、これが必要なんだよね。……今から、耐性訓練の必要性をよく分からせてあげる。もちろん実際にしてみせるよ」

「レステイリア様……？」

兵達が一斉に首を傾げる中レスティリアは大きく手を振り、遠くで魔導士を鍛えているフェランを呼んだ。

「フェランーっ！」

振り向いた彼の上空に魔法陣が出現する。

一拍後には魔法陣が巨大な隕石に変わり、一直線にフェランめがけて落下する。

それは耳をふさぎなくなるような轟音とともに爆発した。

土ぼこりが立ち込め、地面が深くえぐれているのを見て兵士たちが悲鳴を上げる。

「きゃあああフェラン様っ！」

「ちょ、レスティリア様!？」

「あらー……もう一つ弱い魔法にするべきだったかしら。フェランなら大丈夫そうだと思ったけど」

だんだんと煙がおさまっていく中、フェランが低く呻いて身じろぎした。

内心ほっとしたレスティリアは兵たちに説明を始める。

「今のは隕石と見せかけた魔力の塊なんだけど、一般兵なら即死だよ。魔法耐性鍛えてあるフェランだから生きてるの。どう？ 分かったでしょ？ 魔法攻撃で即死しない為にも、耐性訓練はとっても

大切な。貴方たちも耐性を身につけましょうね」

「おおーさすがティリア様だ」

「指揮官レベルのあれだけの魔法間近で見れるなんて、俺たちラッキーだぜ」

兵士たちが一斉に頷き歓声を上げた。レスティリアは誇らしげに胸をはる。

「えへへ、じゃあさっそく訓練を……」

「ティリア様！」

レスティリアを庇うように前に飛び出したセシル。

彼女はそれを押しのけ、突如として飛んできたいくつものナイフに素早く杖を向ける。

作った魔法結界とナイフが衝突し、金属音が響き渡る。

レスティリア一歩手前で、それは落下した。

その数、十本以上。

「ふうー。……危ないことやってくれるじゃない」

レスティリアはフェランを見た。

彼女の予想通り、彼は兵士たちを前に説明をしている。

「今を見たか？ 魔法結界が作れたとしても、攻撃を察知できなければ意味がない。だから魔力だけではなく体力や反射神経、瞬発力を鍛える必要があるのだ」

「フェラン？ 何してくれるのぉー……？」

眉間にしわを寄せたレスティリアは、極めてゆっくりと口を開いた。辺りに冷たい風が吹く。

レスティリアを怒らしてはいけない。それは兵士たちの間で当たり前の常識だった。もちろんその常識にはフェランを怒らすなどいうものもあるのだが、この場合はレスティリアが先決だった。

「ティリア様、お茶はいかがですか？」

「訓練を休憩して向こうでお菓子でも……」

「それはこっちの台詞だレスティリア。お前こそ前ぶれもなく特大の魔法を放つなんてどういう神経をしている。とつさに受身をとったからいいものの、下手したら俺でも死ぬぞ。おまけに訓練場に穴ができたじゃないか」

すっと目を細めたフェランを見て、兵士たちが諦めの顔色になる。

正論をつきつけられ、レスティリアは言葉につまった。

「うつ……それは、その……。でも仕返しするなんて大人げない！」

「仕返しじゃない。訓練の見本だ」

「嘘おっしやい。見本なら私じゃなくてもいいでしょ」

「レステイリアが避けると信じていたからこそその選択だが？」
「うるさい！」

至近距離で睨み合う二人から離れた兵達はアンワールに懇願した。

「アンワール様……」

「あーはいはい。……フェランやめろ。ティリアも落ち着いて」

兵達を片手でたしなめたアンワールは二人を引き離す。

「アンワール。邪魔！」

「酷いなあ。……ほらティリア、甘いもの食べると落ち着くよ。チヨコレートいる？ 今日の治療院の仕事は僕がかわってあげよう」

しばしの沈黙の後、フェランは溜め息とともに口を開いた。

「まったくお前は、とことんレステイリアに甘いな。まあいつまでもこうしては仕方がない。訓練に戻るぞ。……レステイリア、穴を直してくれるか？」

彼に魔法は使えない。

フェランは不本意ながら彼女に頼むことになる。
レステイリアも自分がやったことなので断れず、面倒くさそうに穴

のそばまで来ると詠唱を始めた。

短く言葉をつむいだ彼女の前にはすっかり元の姿に戻った訓練場。感嘆する兵をちらりと見ると、レスティリアは小首を傾けた。

「それでもう文句ないわね？」

「ああ。魔法の腕は見事としかいいようがないのにな」

「なのに、何よ」

「はいはいストップ！ 訓練戻るよ」

再度睨み合った二人の間にアンワールが割り込み、ようやく訓練が再開されたのだった。

治療院にて

「ちょ、ティリア。何この大人数……」

「アンワールが今日の治療院の仕事引き受けるって言ったんでしょ」

夕刻。城内にあるレスティリアの魔法病院は治療を待つ兵士たちであふれていた。

昨日の治療を途中で強制終了したうえに今朝は怪我人続出の相互訓練を行い、さらに今日はフェランの軍隊長率いる北方遠征の終了日。治療院がかなりの大忙しになることは百も承知していたから、素直にアンワールの言うことを聞いたのだ。

ちなみにアンワールは弓と魔法を合体させることが出来るため、魔力はそれなりにある。もちろん魔導士ほどではないが。

「あのさあ。ティリアは僕があんまり魔力ないの知ってるよね。軽い怪我なら普通治療で済ますけど、重病人には魔法で治療するしかないじゃん？ もう魔力尽きてきたのに、まだどんどん治療希望の兵増えてきてるんだけど？」

「そうだね。今日は北方遠征の終了日だもの。今第三部隊が帰宅したところだから、まだまだ増えるわよ」

「ほんつと勘弁……。報告書製作終わってないし深夜会議もあるんだけど」

報告書製作と深夜会議はアンワールの仕事の一部だ。レスティリアは魔法治療院、フェランは新兵訓練よりさらに早く行われる早朝会議などがある。

こんな状態でも兵たちの手当では絶対にぞんざいに行わないのがアンワールだ。話しながらも素早く手当てを終わらしていく。しかしそうしている間に既に第四部隊が帰ってきており治療は終わりを見せない。

「第四部隊のみんなお疲れ様。重傷の人から先に順番回してあげてね」

「ティリア、ごめん。この人数は無理っぽい」

疲労困憊しているアンワールを見かねたレスティリアがソファークから立ち上がった。

彼女はテーブルの上のベルを二回鳴らした。

「お呼びでございますか？」

「どうされました？ 今日の治療院の仕事お休みだとおっしゃいましたよね？」

魔導病院のスタッフ十数名にレスティリアは告げた。

「そのつもりだったんだけど……予想よりかなり多いみたい。手伝ってもらえるかしら。ごめんね？」

彼女の言葉でてきぱきと仕事にとりかかる魔導士たちを眺めつつ、アンワールはソファークに腰をおろした。

「いくら遠征終了日でもこんなに多いものだったかな。尊敬するよ、ティリア」

「ううん……アンワール一人で何とかなる人数だと思ってた。治療院にくる兵は多くても、魔法使わなきゃ助からないぐらいの重傷人はたいてい死んじゃってるから少ないはずなのよ。なのにこんなにいるってことは……もっとたくさん、死んだのかしら。おかしいわね。予想外。遠征途中に何かあったのかな」

訝しがるレスティリアに、治療待ちの兵士がおずおずと声をかけた。

「あの……説明いたしましたようか？ 遠征の帰り際に、敵国の最高指揮官が兵もつれずに一人で姿を見せたのです。何か畏だと思って軍団長は逃げるという判断を下しましたがあちらのほう動きが早く高レベルの魔法を放って……。結界を張りましたが敵の魔力が強く、魔法を少し弱める程度のことしかできずこのありさまでございます。ティリア様がいてくださったら良かったですのに」

「魔法放ったのは一回だけ？ 後数回やればみんな殺せたでしょうに一回だけなの？」

「はい。忽然と姿を消していました」

「そう……。何がしたいのかしら。とにかく物騒ね」

「こりゃ決議会議も深夜会議も長引きそうだな……」

国王、最高指揮官、その他重役が参加する決議会議は午後八時から十時まで。アンワールと各軍隊長が参加する深夜会議は十二時から

一時まで。フェランと各軍副隊長、部隊隊長が参加する早朝会議が四時から五時まで。

しかし今日はどの会議も長引くことが目に見えていた。

「面倒ね。きつと長引いた末、遠征には魔導士と治療院スタッフを何人以上連れて行くこと、ってなるのよ。私と私の隊の仕事が大幅に増えるわ」

「レスティリア！」

唐突な大声に身をすくめたレスティリアが見たものは、フェラン……と彼に背負われている人物だった。ぐったりとフェランに体重を預けているその人物はかなりの重傷に見える。

「その人……あなたのとこの軍隊長じゃない、フェラン！」

「ああ。助けられるか？ ……大丈夫だよな？ 頼む、レスティリア」

普段の勢いをなくし心配そうに尋ねる彼に、治療院の雰囲気が一気に重苦しいものへと変わる。

沈黙した兵たちを前にレスティリアは明るく言った。

「もう！ フェランったら雰囲気重くなるじゃない。全然だいじょーぶ、私の魔法の腕を甘く見ないで頂戴。このぐらいの傷だったらアンワールにだって治せるんじゃない？」

「ティリア、それは勘弁。僕もう魔力残ってないから」

二人のやり取りでいくらかましになったその場の空気。だが内心レスティリアは唇をかみ締めていた。

彼女はフェランの腕を引っ張り集中治療室へと連れて行く。扉を閉めて、言った。

「まずいわよ。他の兵守ろうとしたんでしょね、魔法まともに喰らってる。彼は魔法耐性鍛えてあるから即死は免れたみたいだけど、かなり酷い。荒療治になるわ。ほら早く、そこに下ろして」

ゆっくりと寝台に下ろされた剣士部隊の軍隊長。彼の顔色を見たレスティリアはすぐさま治療にとりかかったのだった。

治療院にて（後書き）

会議のち講義

「お疲れ、ティリア」

「どうだったか……？」

「上手くいったわ。あー疲れた」

決議会議が始まる一分前に会議室へと飛び込んできたレスティリアにアンワールとフェランが声をかけた。彼女は椅子に座るとゆっくりと息をつく。

「そうか……。忙しくさせて悪かったな。ありがとう」

「まったくよ。遠征に連行して行つた魔導士が応急処置をしたおかげでね。治療魔法使える魔導士が一人の中でよく頑張ったと思うわ。今度褒めてあげなきゃ……。あ、ナティール様」

「ご苦労だったなティリア。治療院での仕事、大変だったであろう。皆も知つての通り、今日の議題は北方遠征の件についてだ」

国王ナティールがそう宣言した瞬間、決議会議が始まった。面倒な議題の時はたいがい長引き、時間通りには終わらない。再び彼が会議の終了を宣言した時は深夜一時を過ぎていた。

「深夜会議じゃないのに、なんで一時まで延びるのかしら」

一つ、遠征時には必ず治癒魔法と防御魔法に長けた者を一割以上連れて行くこと。二つ、魔力が少しでもある者は防御魔法の基礎習得を義務づける。三つ、治療院は二十四時間体制で開けておくこと。四つ、報告書作成の回数増加。五つ、敵国指揮官の調査隊結成。

今日決まったのはその五つ。最高指揮官の仕事が大幅に増えた。特にレスティリアの仕事が。

不機嫌になった彼女は退出時の礼もそこに自室へと戻り寝台へ潜り込んだ。

翌日朝早く。

早朝訓練のはずが、指揮官がそろって遅刻しているため時間を持て余している新兵たちは訓練場で思い思いの時間を過ごしていた。

「早朝会議がまだ長引いててフェラン様は来れないらしいぜ、サイラス」

「レスティリアさんとアンワール様はどうしたんでしょうね？」

「アンワール様は報告書作成、レスティリアはさぼりだって。……」

まあ、どっちも噂だけだな」

「何を根拠にそんなこと言うのかなあ、レクス？」

「レスティリア！」

「ティリア様！」

突如姿を見せたレスティリアに、新兵たちが慌てて立ち上がる。言い訳を始めた兵を彼女は軽くいさめた。

「ティリア様、訓練をさぼっていた訳では……」
「あー、いいの。今日の訓練は中止！ 昨日いろいろあったからね…… フェランもアンワールも来れないみたい。この時間は臨時で私が講義を行うことにしたよ。十分後に第七ホールに集合ね。……レクスは今から急いで資料室に走って大陸マップ持ってきてなさい」
「資料室って第七ホールと正反対なんですけど」

この無駄に広い城の中で資料室と第七ホールはかなり距離が離れている。十分間走り続ければ間に合わないこともないと思うが、これは嫌がらせとしか思えない。
抗議の声を上げたレクスをの背中を、レスティリアは押した。

「さ、早く。時間厳守だからみんな遅れないでね」

慌しく新兵たちがホールに集まる中、レスティリアはカウントをしていた。
ゆっくりと時計を見ながら数を数える。

「後一分。まだかしら」
「レスティリア様。彼、来ましたよ」

肩で呼吸をしながら無言で大陸マップを差し出すレクスから、それ

を受け取り前のボードに貼り付けたレスティリア。

「ありがとレクス、座っていいよ。じゃあ国の歴史と軍隊説明講座、始めまーす」

マップの右半分を棒で指し、説明する。

「この程度は常識よね。ここが私たちが今いるところ、ブラーナ帝国よ。ちなみに左半分はアルジャ王国。全面戦争中の敵国ね。もとはたくさん小国があったのだけど、百年前に始まった戦争によってこのように、ブラーナとアルジャに吸収されて今現在この大陸は二国になってるわ」

ここまで説明したレスティリアはめんどくさそうに歴史書を見た。短い思考の後、大幅にページをめくる。

「この他こまごました歴史や王族名はとばすわ。覚えておいて欲しいのは今現在のブラーナの国王陛下はナティール様だってこと。先祖とかは知らなくてもそれほど困らないと思うけど……知リたかつたら勝手に調べてね。ここからはブラーナの軍制度についての説明ね」

「志願した兵士は、どの指揮官のもとで戦うかを自由に選ぶことができます。この国の最高指揮官はフェラン、アンワール、私の三人指揮官はそれぞれ軍を二つ持っているのね。一つは配下、もう一つ

は直属。直属軍隊は指揮官が直接指揮をするけど配下の軍隊はそういう機会は少ないわ。そこが直属と配下で大きく違う点かしら。配下の軍隊は誰でも入れるけど直属の軍隊は厳しいテストに受かった人、または指揮官直々に声をかけられた人しか入れません」

だから直属軍隊やガーディアンは兵士たちの憧れの的なのだ。

「そして直属軍隊、配下軍隊で各十名づつ選ばれる有能な兵士がガーディアンと呼ばれます。そしてガーディアンの第一席になった者は軍隊長を勤めてもらいます。ガーディアンになると特別称号もらえたり、指揮官との関わりが一番深かったり……と凄い名誉が手に入るから、目指す者が多いのよ。それにガーディアンになったら陛下のお目に止まってナティール様の軍隊に入れることもあるしね」

「ティリア様、質問が。ガーディアンになるにはどうすればいいですか？ それと特別称号って？」

「そうね。指揮官直々に指名されればなれるわよ。でも指名されるってことは今いるガーディアンが戦えなくなつて外されるってことだからほとんど無いと思つて。他にも、今いるガーディアンから奪い取るって方法もあるけど……あまりおススメしないわ」

質問を受けたレスティリアは答えを曖昧に濁した。

ガーディアンに憧れる者が多いため、実はこの世界、結構どろどろしていたりする。仲間内で戦いあうようなものだ。ある程度の実力を認められれば、今いるガーディアンに決闘を望み一対一でガーディアンの座をかけて戦いあうことができるが情熱的になりすぎて双方が死亡した例は後を経たない。

「特別称号の説明ね。例えば私の軍の隊長セシルは、幻想世界の最後の晚餐第一席なんて呼ばれることもあるのよ。幻想世界ってのが私の直属軍の名前。最後の晚餐ってのが幻想世界のガーディアンだけに許された特別称号。そして隊長だから第一席。こんな感じね。次の時間はフェランと走りこみらしいわよ」

「基本剣術ではないのですか？」

不満そうに声をあげる兵。そりゃ、ひたすら走るような訓練よりも剣ふりまわしたいのは分かる。でも大切なのは基本なのだ。

「新兵は、基本的な戦術もろもろより足腰を徹底的に鍛えられるのよ。そういうもののなの。文句だったらフェランに言いなさい」

「おい、どういことだレステイリア」

「……来るのが遅いわよ。じゃあ、新兵諸君！ またねー」

やって来たフェランとは逆に、レステイリアはホールから出て行く。新兵たちは急いで頭を下げたのだった。

会議のち講義（後書き）

初めての後書きです。まずは、私の小説を読んで下さりありがとうございます。ございます。まだまだ続くので末永くお付き合い頂けたらなー、と思います。

今回は世界観を無理やり……？つめこみました。分かりにくくてすみません。結局言いたかったのは、「ブラーナとアルジャの二国でどんぱち（戦争）している」です！

また今度編集し直そう……。

陽が傾いたら始まる

「ティリア！　ちょうど良かった」

講義を終え、治療院の扉を開けたレスティリアは嫌な予感がしてすぐさま扉を閉めた。そのまま踵を返そうとしたところで腕をつかまれ仕方なく振り返る。

「何よ……、って顔色悪いねアンワール」

「あはは。深夜会議が長引いたあげくに報告書作成がまだ終わらなくてねー」

「寝てないの？　あなた昼すぎから私といっしょにアルジャと戦争じゃない。気ぬいたらやられるわよ。報告書なんて直属兵にでも任しておけばいいのに」

「そういう訳にもいかないんだ。ティリア手伝ってくれる？」

最初からそれが目的でここにいたな、と推測したレスティリアは首を横に振った。それらしい理由をつらつらと並べる。

「私。講義終わったばかり。治療院の仕事もあるし、その後は行かなきゃだし、無理」

「頼む！」

「その辺の兵に頼んでよ」

「これ重要なものだから、一般兵には見せられないんだ」

「もしかして北方遠征の件について？ 嫌だ、アルジャめ。やってくれるじゃないの。おかげで仕事大量に増えたわ。すぐに主犯探し出してロープでぐるぐる巻きにして、地下牢に放り込んでやるんだから！」

彼女は忘れていた話題を思い出し怒りをたぎらせた。やわらかい滑らかな素材で作られたドレスを握り、しわを作ってしまう。それを撫で付けて直しながら、彼女はベルを鳴らした。

「お呼びでございますか？」

「冷やしたジュース持ってきて。私と、アンワールの二つね。それから適当にお菓子も」

「かしこまりました。すぐにお持ちいたします」

言葉通りテーブルの上にはすぐに果物のジュースと焼き菓子が並べられた。

「手伝ってくれるんだ！」

「いいえ。まあ、お菓子でも食べながらゆっくり報告書書いてね」

やはり手伝ってはくれないのか。

アンワールは大げさに肩を落としてつつも既に諦めていたのか、ペンを手に取る。彼の手元の書類をレステイリアが覗き込んだ。

「丁寧すぎだわ。だから時間かかるのよ」

「これでもおおざっぱなんだけどな。昨日は色々ありすぎて、どうしても書く事多くなるだろ？」

「でもさあ、まだ半分も終わってないじゃん。開戦に間に合うの？ いっしょに行くのフェランじゃなくて私なのよ？ 比較的重要な場所だから落としちゃダメってナティール様に釘さされてるし、困るんだけど」

「深夜からずーっと書き続けてこれなんだ、許してくれ……」

「ちよつとアンワール、こないつもり！？」

昨日治療を手伝わしたアンワールが疲れているのは知っているがそれどころじゃない。レスティリアは彼の肩を揺さぶる。

これは自国内の訓練ではなく敵国との戦争なのだ。いくらめんどくさがりの彼女といえど、この二日の指揮で戦場が変わると言っても過言ではない開戦日と決戦日はサボれない。最も、その二日しか現地にいなかった場合もあるが。

「行かなきゃいけないのは百も承知だけどさ、報告書今日中について陛下に頼まれててね……」

「こないなら代役！ちゃんとフェランに頼んどいてよね！」

「フェランか……。彼、早朝会議あったし今は新兵指導してるからなあ。すぐ行くから最初だけ、ティリア一人じゃ無理？……やつはダメだなごめん。頼んでくるよ」

「もう時間ないわよ。私、先行ってるからね」

普通なら一戦場一人の指揮官だ。一戦場に二人も三人も使っていた

ら指揮官が過労死してしまう。だが今回は昨日の事を考慮したけっか、二人の指揮官と五人のガーディアン、それに一般兵と新兵をつけることになった。全く、本当に面倒事が起こったもんだ。

レスティリアは廊下にヒール音を響かせながら眉を寄せた。

「という訳だレスティリア。よろしく頼む」

「あーはいはい。言わなくても知ってるよフェラン、よろしく」

「……ではまず兵の配置を決めようか」

気怠げに手をひらひらと振る彼女の前につきつけられたのは戦場の大方の見取り図。今回は楽だ。

どこから奇襲が来るかも分からない森林や相手の拠点、倒れる兵が続出する灼熱の砂漠、ではなく平原だ。隠れるところもない一面の草原原。しかしところどころ焼けこげていたり地面がでこぼこだったりすることから、この土地を巡って長年の間争いが繰り広げられていたことが伺える。

穀物が育ちやすい肥えた土地。しかし二国のだ真ん中にあるという立地の悪さゆえ、土地の支配権はころころ変わるのだ。よってここで、植えられた作物を収穫するなんてことはほとんどない。

「いつもと同じよ。剣兵が突撃、弓と魔法で後列から援護。この土

地で奇襲の心配はないから部隊は分けずに混合して。ただし今回は安全策で、高度な防壁壁を作る魔導兵を少し前線に組み込むわ。彼らにはガーディアンが半数と一等兵以上の兵士がついて護衛。残りの半数のガーディアンには最前線で派手に暴れてもらう。異論は？」

「そうだな……。新兵はどこにつける？」

これが難しい。最前線などにだせばすぐ殺されてしまうし、かといって後方に置いてても経験がつかない。

容姿こそ偉く可憐な令嬢だが、レスティリアはブラーナーの軍師だ。臨機横転に指揮を変え、時には突拍子もない作戦を生み出し成功させる。頭の良さで彼女の右にでる者はいない。

「最後列につけるのがオーソドックスだけど今回は……。剣弓魔で各二人ずつ六人一組でペアをつくってもらおうかなあ。緊張感なくなるから熟練兵つけずに、自分たちだけで中後衛。でもすぐに助けられるように中前衛に“鷹の目”配置するのがいいかな」

「アンワールのとこのガーディアンか……。あいつは凄いな。どんなに遠くの敵でも最速で見つけて射殺してしまう」

「何よ。彼、最前線の方が良かったの？」

「いや、なかなかいい配置だと思うぞ。今回は不安が大きいからな……。安全策に超した事はない」

考え込むように顎に手をやったフェランは軍隊長に指示を飛ばしていく。

真上にある太陽はどこまでも赤く、大きい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2067n/>

造られた少女と人間

2011年10月6日12時29分発行